

## 『キーフさん』

2022年05月02日

妻の友人から2冊の本が送られて来た。深田未来生 木村利人 共著『ボクたちは軍国少年だった！平和を希求するふたりの自伝』と木村恵子著『キーフさん ある少年の戦争と平和の物語』の2冊である。深田未来生氏は同志社大学神学部の教授で、私は京都に行った時、一度、講演を聞いた記憶がある。木村利人氏は生命倫理学の学者である。利人は「リひと」と読み、ドイツ語の「リヒト・光」から、名付けられたそうである。二人は1933年と1934年生まれと同世代で、戦時中は軍国少年だったという。二人の自伝を興味深く読んだ。学びを深め、キリスト者として、それぞれの領域で世界的に活躍されている。

利人氏は、「しあわせなら手をたたこう/しあわせなら態度でしめそうよ/ほら、みんなて手をたたこう」の作詞者である。この歌は、夏季キャンプに行った時は必ず歌う歌で、これほど知られた歌はないのではないか。この歌について、利人氏は下記のように書いている。しあわせの「し」は「知ること」の「し」である。過去の戦争の歴史的事実を知らなかったことでは済まされない。知らないことは、現状を肯定する「犯罪」になる。知るとは未来へと生きる出発点である。しあわせの「あ」は「愛する」の「あ」である。再び戦うことなく互いに愛し合い、共に祈りつつ平和を目指して生きようとする。愛し合うことがキリストの愛と赦しの故に可能になった。しあわせの「わ」は「和・輪」の「わ」である。「和」はもちろん「平和」の「わ」であるが、更に「輪」の意味を込め、「平和の輪」を広めていくことである。国の枠を超えて「平和の輪」によるつながりは可能である。しあわせの「せ」は「世界」の「せ」である。現代は世界と繋がって、関係を深めている。世界に目を向けて、生きようとする時代である。このようなメッセージを込めた思いで「しあわせなら手をたたこう」を作詞したと聞いて、歌の奥深さを知らされた。

木村恵子氏の『キーフさん ある少年の戦争と平和の物語』は、2006年に出版され、絶版になったので、2019年に「新版」として出版された。著者・恵子氏は、利人氏の妻である。妻が、夫の少年時代の戦時下の体験を聞き、夫が平和を求めて生きる契機となった事柄や、様々な不思議な導きを、夫に成り代わって、著した極めて珍しい本である。

利人氏の少年時代は、戦争の真っ盛りで、戦時色一色であった。戦局が陰しくなり、山梨県に学童疎開した。空腹で、イナゴを煎って食べ、カボチャやサツマイモのつるも盗んで食べた。その時も、徹底した「鬼畜米英」の教育を受け、天皇のために身を献げる思いを募らせていた。そして、8月15日、天皇の詔勅を聞き、戦争が終わったことは喜んだが、価値が一変したことに戸惑った。軍国主義から、民主主義への転換は大人への大きな不信を生んだ。この不信が、戦争から平和への希求を確固とする生き方になった。9条の会に連なっている人々は、国に騙されていたことから目覚め、平和を謳う9条を守る運動に関わるようになったと言う人が多い。利人氏は、フィリピンのルバング島に敗戦を知らず潜み続けた小野田寛郎氏の救出や、731部隊をはじめ、アジア諸国で犯した残虐な加害責任を見聞きし、深く謝罪すべきことと認識する。しあわせの「し」の歴史の事実を「知ること」によって、平和への思いを深め、平和実現を生涯の使命としている。

利人氏は、中学2年生の時、進駐軍のキーフさんと出会い、習いたての英語で会話し、彼の宿舎にまで招かれ、米国人の豊かさ、優しさに触れる。その記憶が鮮明に残っていた。40年後にキーフさんと感激の再会を果たす。彼は人を殺すことを研究していたが、今は、人と共に生きる神父になっていた。殺し合うことから生かし合うことへと変身したキーフさんが本書の根底のテーマで、タイトルを彼の名「キーフさん」にしている。